

### 較差を何う発音するか

較差 (Range) すなわち最大値と最小値の差を、こうさと発音する人もあるし、又かくさと発音する人もある。気象用語集 (昭24) 及び気象学用語採録集 (昭32.2) によれば「かくさ」になっているが、これは「こうさ」にすべきだと思う。

私の調べた範囲ではかくさとなっているのが上記2冊と気象辞典 (天然社) 及び理化学辞典 (岩波) であり、こうさとなっているのは地上気象観測法・科学の辞典 (岩波) そして気象の辞典 (東京堂) である。国語の辞書には何れにも出ていなかった。これは較差がRangeを訳して作られた専門語であるためらしい。また新修漢和大辞典 (博文館) によれば、「較」の発音は①カク②コウ・ケウであり、①の読みの場合の字義は○ヨコギ○ニバ○キソウ・アラソウ、○の場合は○ホガ○イヂアルシ・アキラカ○クラブとなっているので、やはりこうさと読むべきであろう。ついでながら比較も本来はひこうと読むのが正しい。かくさと読むようになった原因は理化学辞典あたりにあるのではあるまいか。

本誌1月号に桜庭信一氏が気象用語委員会から、同委員会の発足・経過について述べて居られるが、その中の用語決定の原則に「2) 同音異義の用語はつとめてこれをさける。3) 語呂のよい用語を選ぶ」とあるので、こうさと読んだ方がこの2つの条項に適うと思う。なぜなら、かくさよりこうさの方が耳ざわりがよいし、同音異義語もない。そして先にあげた気象学用語採録集は、同委員会の編さんによるもので気象用語は遠からずこれに統一されるのだから、もう一度同委員会でも審議して、こうさに訂正・統一すべきだと思う。

(仙台管区気象台 安部修一郎)

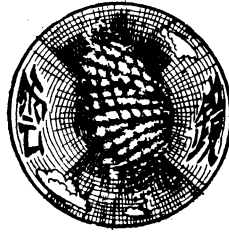
### 鏡 雲

気象研究ノートの第8巻第3号にN氏が気象学はもっと楽しいものではないか、と云うような題目で、巻頭に意見を述べている。主旨はあまりはっきりしないが、機関誌をもっと面白くして欲しい、と云うことらしい。もっともなことであるが、各所でこの巻頭言が話題になった。それは、気象学はお風呂で考えるにいいものだから、研究はもっと楽しいものだ、と云うような修飾語が入ったために、このアクセサリーが強すぎて、物議をかもしたらしい。楽しいと云うことは主観的なもので人によって違うから、K氏が言っているように、気象学のどういふ論文が楽しくやったもので、どう云う論文がそうでないのか、私どもにはわからない。N氏もこれをきめようと云うわけではないだろうし、どんな研究にも研究者にはそれ相当の楽しさがあるのだろう。N氏は要するにもっと面白く書いて貰いたいと云うのだろう。

ここで別の面から問題にしたいのは、このような巻頭言のある気象研究ノートに、半分近い頁数を割いて、フィジックの説明が長々とのっていることである。内容についてはとやかく云わないが、これほど詳しい説明を必要とする読者がはたして何人いるだろうかと云うことである。(Z生)

感想 敗戦の年とその翌年の気象集誌の発行はそれぞれ1冊である。これからおして研究活動も戦後1、2年は戦争の影響をうけて一時ストップしたのではないかと思われるのであるが、これは印刷事情悪化のためで、この頃の研究活動がおどろくほど活潑であることは注目すべきことである。これを知るための資料として、中央気象台発行の研究速報は学史の資料としてわすれてならぬものである。よく調べてみるとその後の発展の芽生えはこの速報の中にほとんど全部といってよいほどふくまれていることがわかる。戦時中に目的を定めて行つた自主的研究や調査の自由な発表の成果であって、技術との結びつきも密接である。戦時中の学問の発展は機密事情のため決して健全なものでなく、わずかな時差ではあるがその発展が戦後にあることもみのがしてはならない。

一体研究というものにはある目的を定めて行う場合は誠に困難な場合が多く、研究が途中で沈没する場合も多いので、対象はしらべやすい孤立系や現想状態が多くなり最初の困難をのりこえて外国の研究の後を追うことが失敗の少い研究の方法となるのである。この頃のものは目標のはっきりしたものが多く、困難をよくのりこえている。人工衛星が空を自由にとびまわる時代がきたわけであるが、われわれはもう一度何をなすべきかよく考えてみなくてはならないと思う。(SQS)



### 匿名批評の限界

朝日新聞に「ひととき」という欄があって、誌上匿名を許しているが、それは婦人の特殊性を今日なお認めなくてはならない日本的現実因ると聞いた。ところで、

「天気」雲鏡欄が創刊以来気象界に一脈の清風を齎したとすれば、これも正しくは気象界のうとうしさを語るものでもあろうか。当時言論は自由であろうが、責任の伴ぬ自由はない。従って、如何に匿名批評には匿名批評の長所があるとは云え、権力関係の極端なアンバランスのため、言論の自由が、つまりは執筆者の安全が、匿名以外に守り切れない特別な場合に限られるのが原則であろう。数行の匿名批評が犀利を極め論敵の心胆を寒からしめるのはその時であり、匿名の要なき匿名批評が腐敗、無力化するは必然であろう。

一方、匿名というものには人の気をそそる心理的な遊びがある。われながらもウンザリしている誕生以来の名前をかえて、偶には云いたい放題を云ってみたいと云う誘惑。読者は読者でクイズでもやる調子で、この匿名は誰だろう、などと、いや結構楽しめるというもので、それならそれで、こういうものとしてまた匿名批評も頂くことにすればよろしい。

これを要するに、「本格的に問題を提起し、それについての議論が進展、進化していくような評論」(倉島厚・3巻8号)を従来の匿名批評形式に望むこと自体がそもそも無理な注文であって、ここにも「たとえば気象評論の要請される理由がある」(推定渡辺次雄、3巻2号)であると筆者は考える。(堀内剛二)